

ロンドン大火前後における都市空間構成について

ロンドン イギリス テムズ川
ロンドン大火 都市空間構造

正会員 ○丹生 孝太 *
正会員 杉本 俊多 **

1. 序

ロンドンはイギリス南部、テムズ川上流 50 キロに位置し、イギリス最大の都市である。都市の起源は古代ローマ時代に遡る。紀元 40 年ごろ、ローマ帝国のクラウディウス帝がブリタニアに進行したことに始まる¹⁾。ブリタニアを征服し、首都ロンドニウムとして都市を形成したことが起源とされる。60 年後の紀元 100 年にはほとんどの地区に建物が建つほど発展していたと考えられている。それから 1500 年間、ロンドンはヴァイキングの侵攻にも耐え、発展を続けた。そして、16 世紀に入り大航海時代を迎えると、ロンドンはさらなる発展を遂げる。イギリス最大の都市であったロンドンは貿易も盛んに行われるようになり 1550 年から 1700 年の 150 年間で人口は約 12 万人から約 50 万人近くまで増加した。人口の急激な増加により、過密な裏通り、掘立小屋など生活環境の悪化が大きな問題となりつつも、ロンドンはさらなる発展と都市の拡張を遂げる。大きな問題もなく発展を続けたロンドンであったが、大きな転機となったのが 1666 年の「ロンドン大火」の発生である。シティ・オブ・ロンドン地区の大部分を焼き尽くす大火により、都市の再構築を余儀なくされた。しかしながら、大火後の回復は著しく、1671 年までには公共建築物の再建はほぼ終了していた。街のシンボルであったセントポール大聖堂も 1711 年に再建が終了している。大火後の再建により、火事に強い組積造の建築物が主流となり、都市構造の改善も行われ、清潔で安全な街になったとされている。

2. 研究の目的と方法

本研究では 1666 年のロンドン大火前後における都市空間の構成を探ろうとするものである。ここでは大火前後における都市の形態変遷に着目し、その形態的な空間構成の変化を探るものである。本論では特にシティ・オブ・ロンドン地区を対象としている。

研究資料は、主に歴史的都市図を使用した。復元に用いる資料として、16,17 世紀（1520 年 1642 年 1666 年 1677 年²⁾）に描かれた都市図、鳥瞰図を用いた。これまでの資料では精度の低い図面もあり、またデフォルメされているため、詳細で正確な比例と寸法が見出される 1875 年の地籍図（ordnance survey map）を用いて、ベース

マップを作成し、復元をする地図のベースとした。そして、ベースマップをもとに、デフォルメされた古地図を正確な寸法、比例の図面に復元して、より客観的な空間構成の読み込みを行った。

また、大火前の区画の大きさ、道路幅、主要施設のデータを得るために 2 次資料として、オックスフォード大学が現地調査などを行い、作成した復元図³⁾も利用した。1666 年の大火前の地図に関してはベースマップと含め、2 次資料含め、復元図の作成を行った。

3. 各年代での都市の変遷過程

3.1 概要

復元平面図より、それぞれの時代の特徴を分析し、変遷過程を追う。1666 年の大火後の復興案は実際には建設されなかったが、その後の都市構造に大きな影響を与えていると考えられるので、合わせて変遷過程を加える。

3.2.1 1520 年（図 1）

1520 年ではロンドンの中心部である市壁を囲むエリアを中心とし、都市が形成され、その市壁を囲むように堀が巡る。市壁は北からの侵攻を食い止めるため、2~3 世紀に建設されたものである。16 世紀においても市壁を利用し都市を形成していることがわかる。

ラドゲートからオールドゲートに延びる古代ローマ時代からの名残である幹線道路（ウェストチープ）を中心とし、この道路周辺に都市が形成されていることがわかる。この幹線道路は商業の中心地区であった。この道路と交差するように、東側のビショップスゲートに抜ける道路は南のサザークにつながる主要な道路である。

市壁内南西部では幹線道路から並行して横に大きく 3 本、縦に 5 本道路があり、グリッドプランを崩した状態で形成し、それに合わせて路地を形成している。このエリアにセントポール大聖堂も位置しており、周辺は大きくスペースがとられ、この時代のランドマークとして存在する。

南東部はビリングスゲートを含め多くの港と税関があったことから、貿易の中心であったことがわかる。

市壁周辺には一部開発が見られる。そのほとんどが西側にみられる。開発が行われるフリートストリートはウ

エストミンスター地区に続き、フリートストリート沿いにはテンプル修道院や、多くの法学院が通りに沿って建設されていることが分かる。

3.2.2 1642年（図2）

市壁内の区画には大きな変化は見られない。市壁周辺について、市壁に沿って作られていた濠がなくなることが分かる。そして、市壁に隣接させ宅地化され、市壁の周辺が徐々に開拓されることが分かる。これは人口の増加に伴い、新しい住居空間が必要になったため¹⁾（実際に1620年代まで国王は宅地開発の抑制を行っていたが、人口増加に伴い断念している。）である。

3.2.3 1666年大火前（図3）

ここで用いた地図は大火直後に復元的に作成されたものである。セントポール大聖堂が周辺建物から独立することや、市壁内の区画内にも一部変化が見られるようになってきた。区画の細分化がおこなわれるようになり、グリッド状の変化もみられるようになってきた。市壁周辺でも開発がより進み、周辺でも住居がかなり見られるようになる。また区画割が細分化されるなど、市壁内と同様の傾向が見られる。1520年からテムズ川沿いに関しては大きな変化はみられない。

3.2.4 1666年大火直後（図4）

大火によって、市壁内部は大部分焼失してしまうことが分かる。復元図で示してある通り、市壁を超え、西側にも被害がおよび、市街地の大半が焼失してしまっていることが分かる。

3.2.5 理想案の考察（図6, 7）

大火後、おもに4つの復興プランが提案されるが、ここでは、クリストファー・レンのプランとジョン・イーブリンのプラン⁴⁾について考察する。それぞれのプランの特徴をあげ、施設との関係を考察する。

・クリストファー・レンの復興プラン（図6）

- ① グリッド状の区画配置
- ② 東側と西側にみられる Piazza（広場）を中心とした放射状の道路
- ③ 川沿いから建物を離して作られる西側の新たな港
- ④ 2本の放射状の幹線道路とその北にある幹線道路がヴィスタの概念を取り入れている。

・ジョン・イーブリンの復興プラン（図7）

- ① グリッド状の区画配置
- ② 西側にみられる教会を中心とした放射状の道路と区画割
- ③ テムズ川沿いに港を建設
- ④ セントポール大聖堂から延びる3本の放射状の道路
- ⑤ 西側にある川を拡張して、水路として利用

⑥ グリッド状のプランのそれぞれの交差点に広場と施設を配置（復興後のセントポール大聖堂や教会など）

両方の復興案で同様のプランがいくつか見られるが、レンのプランはイタリア由来のバロック的な都市計画に対し、イーブリンのプランはイギリス独特の街路ネットワーク型の都市計画の要素が強い。これらの提案を含め、1677年の実際の復興実態を考察する。

3.2.6 1677年（図5）

実際に再建されたプランは2つの復興案とはかなり異なるプランで再建がなされている。実際には街路網の改変はほとんどなく、大火前の区画割に近い状態で再建されていることがわかる。復興された際の大きな特徴を以下に示す。

- ⑤ 大火前から存在するニューゲートからオールドゲートに延びる幹線道路は大きく道路幅を拡張し、それ以外の道路でも拡張が見られる。
- ⑥ 川沿いの空間に関して、建物が川から離されて建設されている。
- ⑦ 市壁の一部が取り壊され、一つの区画として成立している。
- ⑧ 西側にあったフリート川が大きく縮小し、水路として残る。

3.3 テムズ川沿いの環境について

1520年～1677年の150年間で大きく変化しているテムズ川沿いの空間を考察する。

大火前のテムズ川では西側と東側で、港の環境が大きく異なる。⁵⁾

・大火前について（図8）

大火前西側 → 個別の敷地の裏に石造の階段を設け、小規模な船が利用する空間、建築物が川沿いいっぱいに作られ、私的所有のような空間が広がることがわかる。ロンドンブリッジは大型船を通さないために橋脚が加工されており、西側の遡上を制限していた。

大火前東側 → ロンドン塔を中心とし、大きな船が止まるため、建物が川沿いから離され、大きな船が係留できる埠頭の空間が存在する。風景画にも大きな船が数多く係留する様子が描かれている。ビリングスゲートや税関があり、交易として東側のエリアを利用していることが分かる。

・大火後について（図9）

西側 → 建物を川からセットバックさせて荷揚げ用の空間が設けられていることがわかる。交易の量が大幅に増加するなど、ロンドンの交易がより拡大し、西側に

も大きく拡大がみられる。もともと交易を行っていたクイーンハイズやダウゲートなども、そのまま交易港として再建され、西側の港が充実している。大きな船はロンドンブリッジにより通れないものの、数々の港が誕生している。

東側 → 大火で焼失した部分に関して、大火前と同様に川からセットバックさせて建物を作られていることがわかる。大火前と大きくは変わらない。

テムズ川沿いの復興計画については二つの復興案のプランでも示されており、唯一採用されたものであった。これらは交易量の増加により必要になったものであり、川沿いの開発は必要であったと考えられる。

4. 考察

ロンドンの変遷を追うことで、以下のような部分を明確にすることことができた。

① 大火前について

- ・幹線道路を中心として区画が成立しており、グリッドを崩して開発されている。
- ・市壁内は計画的な区画整理というのはほとんど見られず、個別で開発を行っていると考えられる。
- ・1642年以降、周辺の開発も進むが、明確なプランというのは存在しない。

② 大火後について

- ・大火前の街区割に近い状態で再建。復興案とはかなり異なるが、テムズ川沿いには復興案が取り入れられたと考えられる。
- ・市壁の一部が取り壊され始め、一つの区画として成立している。
- ・西側にあった小川が小さくなり、簡単な水路として残る。
- ・大火前と比較すると、街区が小さくなり、道路幅を広げている事がわかる。この変化は、劣悪な環境からの脱却における要因が大きいと思われる。人口は年々増加し、住環境が悪化していた事がよく知られている。復興案でレンやイーブリンが行おうとした事は、この環境を改善する一面も兼ね備えていたと考えられる。

5. 結

16世紀以降、経済が活発化し、それにつれて人口が増加し、都市が成長する中で、エリアによっては大きく変化しているものの、旧市街地については大きな変化は見られないことが明らかとなった。特にテムズ川沿いに関しては、貿易拡大の影響もあり、大きな変更が見られた。旧市街地にあっては土地所有などの観点からも変化しづらく、比較的に保守的な性格であったことが垣間見える。

以上のことからロンドンの大火前後の150年間の経過を考察し、ロンドンの発展に至る経過を観察することにより、ロンドンにおける近世の都市空間構成方法の一端を明確にすることができた。

6. 謝辞

本研究は平成22年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号21560666「大航海時代ヨーロッパにおける都市計画理念の形成に関する研究」の研究成果の一端をなす。これに感謝いたします。

註

1) ロンドンの歴史の概要については主に以下を参照した。
編者：ヒュー・クラウト 監訳者：中村秀勝「ロンドン歴史地図」
東京書籍株式会社 1997年

- 2) 復元に用いた都市図は以下の通りである。
- ・1642年：“A Plan of the City and Environs of London as fortified by Order of Parliament in the Years 1642 & 1643”。
作者Walter Harrison 出典:MAPCO(Map And Plan Collection Online)
 - ・1666年：“A Plan of the City and Liberties of London, showing the extent of the Dreadful Conflagration in the Year 1666”
作者:John Noorthouck 出典:MAPCO(Map And Plan Collection Online)
 - ・1677年：“Large and Accurate Map of the City of LONDON.
(Ichnographically describing all the Streets, Lanes, Alleys,
Courts, Yards, Churches, Halls and Houses, &c.)”
作者：John Ogilby and William Morgan. 出典: British Library

3) 1520年の都市図を復元する際に、2次資料として以下を使用した。

著者:Mary D.Lobel ,Members of the International Commission for the Topographical History of Town
“The City of London from prehistoric Times to c.1520”
出版社:Oxford University press in Conjunction with the historic Towns Trust,1989

- 4) 大火後の復興プランは以下を使用した
- ・クリストファー・レンの復興プラン(図6)：“Sir Christopher Wren’s Plan for Rebuilding The City of London After the Dreadfull Conflagration In 1666.” 作者:Walter Harrison 出典:同上
 - ・ジョン・イーブリンの復興プラン(図7)：“Sir John Evelyn’s Plan For Rebuilding The City Of London After The Great Fire In 1666.” 作者:Walter Harrison 出典:同上
- 5) 大火前のテムズ川沿いの状況を知るのに、以下の風景画を使用した。“A View of London and the Thames circa 1616” 作者:Claes Jansz. Visscher 所蔵:British Library

図版出典

図1~5, 8,9 筆者作成

図6,7 上記の復興プランを参照



図1：1520年の復元平面図

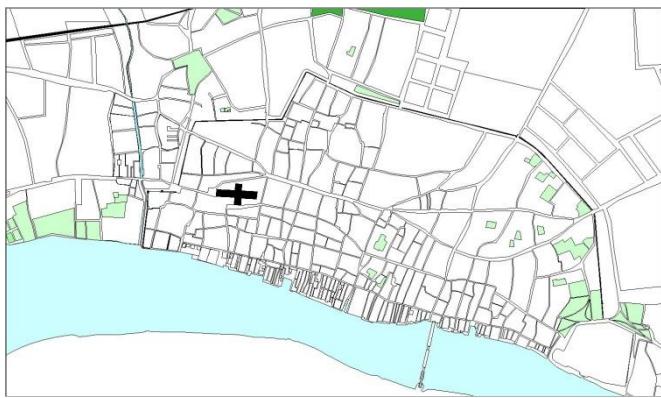


図2：1642年の復元平面図

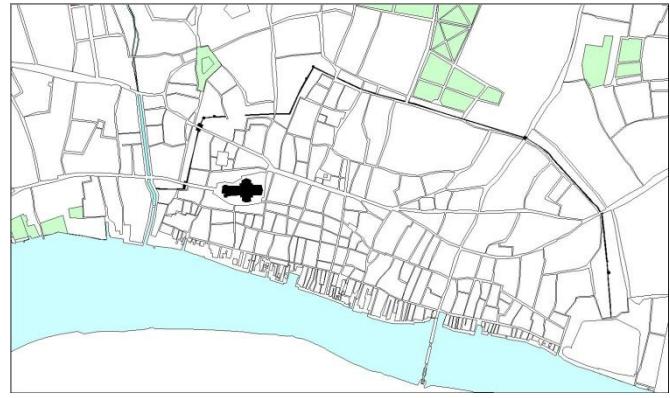


図5：1667年の復元平面図

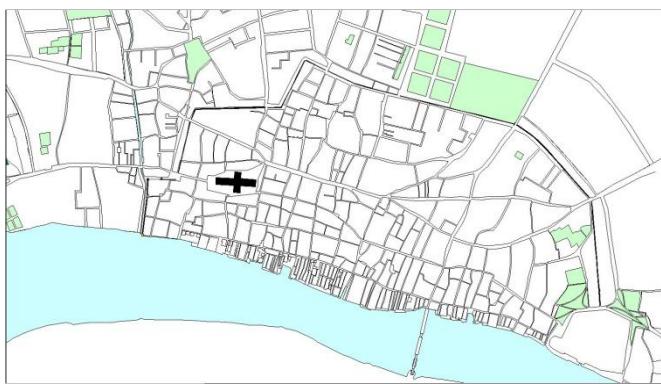


図3：1666年大火前の復元平面図

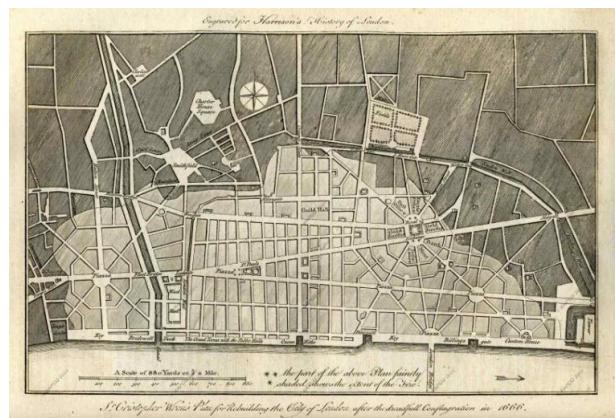


図6：クリストファー・レンの復興プラン

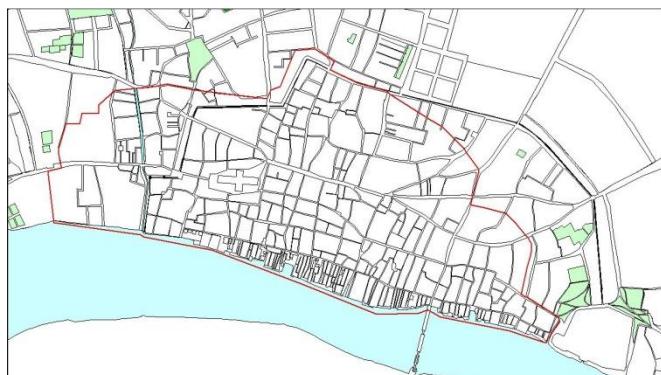


図4：1666年大火直後の復元平面図

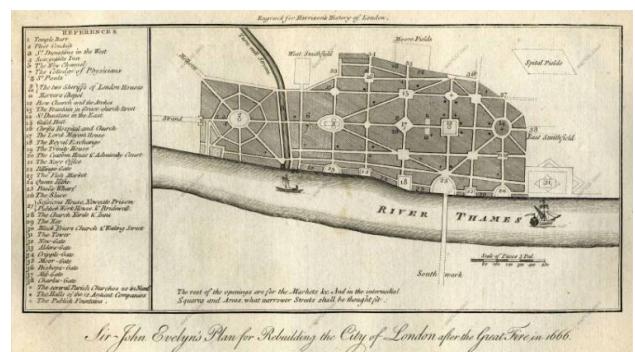


図7：ジョン・イーブリンの復元プラン



図8：1520年頃のテムズ川沿いの復元平面図

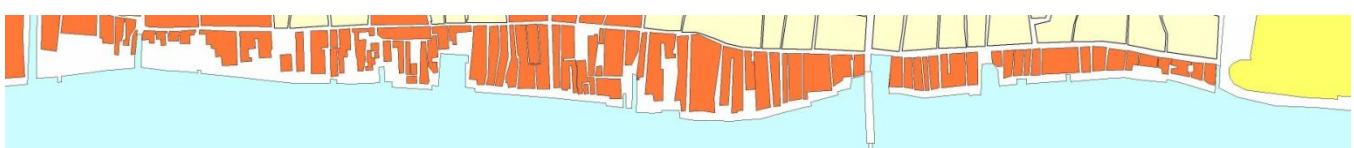


図9：1677年のテムズ川沿いの復元平面図

*広島大学大学院工学研究科 博士課程前期

**広島大学大学院工学研究科 教授・工学博士

*Graduate School of Engineering, Hiroshima Univ

**Prof.Graduate School of Engineering,Hiroshima Univ